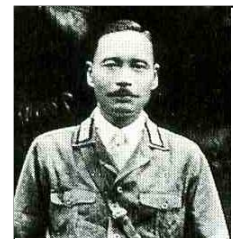


コラム 71— 大東亜戦争におけるアジア諸国への独立支援

<ビルマ独立を支援する「南機関」>

1941(昭和16)年2月1日、ビルマの独立を支援する「南機関」が誕生します。ビルマの独立運動は1930年代に活発化し、運動の前衛は1930年に結成された「タキン党」でありました。タキン党にはラングーン大学の学生が多数参加しており、1930年後半に学生運動のリーダーとして活躍したのがオン・サンらであります。

1940年に入ると、イギリスは独立運動に弾圧を加え始め、オン・サンらは外国勢力からの援助を求めるため密出国し、アモイに潜伏します。一方、1940年に入り、重慶の蒋介石政権に対するビルマの援蒋ルート(ラングーン港からマンダレー、ラシオを経由し、山岳地帯を越えて昆明に達する自動車道路)の輸送量が最も多くなってきます。1940年3月、日本は、鈴木敬司陸軍大佐(写真)にし、ビルマルート遮断の方策について研究するように内示をえま 鈴木敬司陸軍大佐



鈴木敬司
陸軍大佐

マについて調べていくうちに、タキン党を中核とする独立運動に着目しました。

そこで鈴木大佐は、オン・サンたちがアモイに潜伏していることを知り、彼らを日本に招くことを決意し、郷里の浜松にかくまいます。オン・サンたちの来日を契機として、陸海軍は協力して本格的な対ビルマ工作を推進することを決定します。こうして日本は、ビルマ独立の支援とビルマの援蒋ルートの遮断を目的として、鈴木敬司陸軍大佐を機関長とする大本营直属の特務機関「南機関」を発足します。

「南機関」は、ビルマ独立運動の中核となるオン・サンらビルマ人青年30名を秘かに国外に脱出させ、海南島で日本教官により猛烈な軍事訓練を実施しました。この青年たちこそ、後にビルマ独立の30人志士と仰がれる青年たちでありました。訓練終了後、彼らに武器、資金を与えてビルマに再侵入させ、反英運動を起こし、武装蜂起をさせてビルマ全土を占領し、ビルマルートを遮断しようとする計画でありました。

大東亜戦争開戦とともに、日本軍第15軍(軍司令官・飯田祥二郎中将)がタイに進駐し、南機関は第15軍指揮下に移ります。12月28日、鈴木大佐が司令官となって、日本軍が訓練した30人志士を中心に、タイのバンコクで「ビルマ独立義勇軍」BIAが結成されました。翌年の1月、日本軍とBIAは、ビルマに向かって進軍を開始、前進とともにビルマの独立運動はすさまじい勢いで進展し、青年たちはどしどしBIAに身を投じました。

3月7日、英印軍がラングーンを放棄して脱出したため、日本軍とBIAは続々とラングーンに入城し、このときのBIAの兵力は約1万余りまで増加していました。ラングーン入城後、駅前の競技場で観兵式典を行い、30人志士のリーダーであるオン・

対
与

動

る
か

サンを先頭にした BIA の行進に、ラングーン市民は熱狂しました。

昭和 17 年 6 月、日本軍はビルマ全土を占領し、オン・サンが推奨するビルマの指導者バー・モウを首班とするビルマ軍政府を樹立、援蔣ルートも遮断することができました。そして、1943（昭和 18）年 8 月 1 日、ビルマはバー・モウを首班として独立し、BIA は BNA（ビルマ国民軍）に改名、オン・サンが国防大臣に就任しました。その時のビルマ人の国民的感動は、その極みに達し、その時の状況をバー・モウは、次のように述べています。「それは言葉で言い表せないほど幸せな日だった。我々すべてにとって、新しい時代の夜明けだった。国民こぞって祝うために、各地域を代表する委員会が設けられた。くる日もくる日も群集がパゴダを訪れて灯明をあげ、花を捧げた。人々は集い、日本語で万歳を叫んで、日本に対する深い感謝を表す決意をした」

1945 年、日本軍の撤退とともに、いったん国外に逃れていたイギリス軍が再び植民地支配を目指したのに対し、オン・サンは日本軍によって育てられた 10 万人の人民義勇軍を組織して、対英交渉を強力に推し進めました。そしてついに、1948（昭和 23）年 1 月 4 日、ビルマは完全独立を果たしました。

時が変わって、ビルマの第 32 回目の独立記念日に当たる 1980（昭和 55）年 1 月 4 日、ネ・ウィン大統領は、かつての戦友であった日本軍人を独立記念式典に多数招きました。ビルマは旧日本軍人をどのように遇したか。この式典に招かれた高市章一氏は、その模様を「ビルマに残る日本精神」と題して、次のように書いております。

「今年（昭和 55 年）の 1 月 4 日、ビルマの独立記念式典に、ネ・ウィン大統領から旧南機関の川島威伸元大尉、泉谷達郎元中尉、大野茂男氏（ビルマ海軍の創始者）の 3 氏が主賓として、さらに陸士 57 期、58 期、ビルマ独立義勇軍、ビルマ防衛軍顧問団などの関係者が招待を受けた。川島氏は、南機関長鈴木敬司大佐の片腕として、ビルマ独立三十志士といわれるオン・サン将軍を始めネ・ウィン大統領らを戦前秘かに海南島において訓練した教育の責任者であった。泉谷、大野両氏も南機関の教官であった。

ネ・ウィン大統領がビルマ独立の恩人として、又若き日、3 氏からうけた恩義に報いるための礼を尽くした招待であった。式典をいろどる無数の豆電球で飾り付けられた大統領官邸で、3 氏と視線が合うや、「ヤアー」と抱きつくように身を寄せて握手を交わした。大統領の 3 氏に対する師の礼、敬愛の情をもって接する特別の行為の様に、千余名の招待客は驚異の目をもって、この光景に見とれていた。食後、官邸内の野外劇場でビルマの民族舞踊が始まろうとする時、「大統領の両側に 3 先生の席が用意されています」とお付のものが迎えに来た。その隣は西ドイツ大使の席であったとか……。何と心にくいもてなし方であろうか。礼節を尊び、昔を忘れぬ大統領の心遣いがどれほど我々の胸を打ったことか。

1 月 8 日には、戦没者慰霊祭のあと、シェダゴンパゴダの僧院で、現職を退いた三十志士、57 期、58 期、ミングランド幹部候補生隊出身者、幼年学校関係の同期生歓

迎パーティーが開かれた。通訳のウ・ミヤタン氏（57期、退役中佐）が流暢な日本語で『只今よりビルマ方式に従って川島先生に対してお誓いさせていただきます・・・略・・・』と挨拶。別室に連れて行かれた川島氏は、真新しいビルマの正装をさせられ、金色に輝く等身大の仏像の前の一段高い椅子に座らされた。静寂の中、心を込めた合掌の中に、三帰依が唱えられ、床に頭をすりつけんばかりの敬虔な礼拝が続き、我々も自然に三拝に加わる。ビルマの陸士代表テイ・マウング氏（57期、退役大佐）が、『我々は日本の陸軍士官学校で、お国の為に命を捧げることを習いました。我々ビルマの同志も、お国の為に命を捧げました。日本精神はビルマに残っております。日本の心はビルマが受けついでおります。』と挨拶した。それは大きな感動となって押し寄せてきた。今でも我々の耳朶（じだ）に、ビルマ旧軍人の言葉が魂を揺さぶるように強く響いている。

続いて翌56年1月4日、同じ独立記念日に当たって、ビルマ独立に貢献した7名の日本人に対して、感謝の意を表し、ビルマの最高勲章である「オン・サンの旗勲章」が贈られました。その7名とは、鈴木敬司陸軍少将未亡人節子氏、杉井満氏、川島威伸元大尉、泉谷達郎元中尉、高橋八郎元中尉、赤井（旧姓鈴木）八郎氏、水谷伊那雄氏の各氏で、全員が南機関関係者でありました。」

<インド独立工作の特務機関>

1941（昭和16）年9月、インド独立工作の特務機関である「F機関」が発足します。対米英開戦前、日本陸軍は当時イギリスの植民地であったインドの独立工作を画策し始め、タイ王国公使館付武官田村浩陸軍大佐の下に特務機関であるF機関を設置しました。この機関は、参謀本部の藤原岩市少（写真）以下10名程で構成され、機関長藤原の頭文字と自由と情を意味する英語をかけてF機関と命名されました。F機関の員は、すべて陸軍中野学校出身の青年将校であり、発足当初F機関に与えられた任務は、「インド独立連盟（I I L）やマレー・国人などによる反英団体との交渉・支援を中心としたマレー方面の工作活動に関して、田村大佐を補佐する」ということでありましたが、開戦直前より南方軍の指揮下となり、I I Lと協力し工作活動に当たり、インド国民軍（I N A）の編成も行いました。藤原岩市は、F機関の立場をこのように説明しております。「私たちの仕事は、力をもって敵や住民を屈服するのではない。威容をもって敵や住民を威服するものではない。私達は徳義と誠心を唯一の武器として、敵に住民に臨むのである。」この言に誤りはなく、F機関のメンバーは、一貫してほぼ丸腰で活動を続けていました。



藤原岩市
陸軍少佐

あ
佐
友
人
機
中
面

大東亜戦争が始ると、F機関は、日本軍がマレー半島で快進撃を続ける中、英領マレーのアロースターに最初の陣地を獲得するが、その地方に取り残された英軍の一部隊は、イギリス人将校1名のほか兵士は全員インド系だったといえます。そこで藤原機関長とI I Lの指導者・プリタムシン翁は、車にインド国旗を付けて、敵陣に乗

り込み、イギリス人将校に投降を要求、将校は日本軍に包囲された現状を知り、抵抗を諦めます。配下のインド人兵は、糸車の描かれたインド国旗を見て啞然とし、そして藤原機関長はその場で演説をします。「諸君！ 私はインド人将校との友好を取り結ぶために来た日本軍の藤原少佐である」この言葉がヒンドゥー語に訳されると、兵士達はどよめいたといえます。

そして完全な武装解除が行われましたが、その際率先して兵士に指令を出したインド人将校こそ、後にインド国民軍（INA）の創設者となる歴史的人物モハーシン大尉でありました。アロースターの町は、権力の空白で風紀混乱が著しく、インド人やマレー人の不逞分子がシナ人の商店や家を襲って、財産の収奪を始めており、町に入った藤原機関長は、モハーシン大尉に治安維持を取り仕切るよう申し出ます。大尉は、昨日まで敵であった自分に警備を任せられ驚きました。

そして、12月17日、藤原機関長はIILメンバーやインド人将校、下士官全員を集めてささやかな昼食会を行いました。テーブルにあがったのはインド料理でした。モハーシン大尉は感激の余り、椅子から立ち上がりスピーチを始めました。「戦勝軍の要職にある日本軍参謀が、一昨日投降したばかりの敗戦軍のインド兵捕虜、それも下士官まで加えて、同じ食卓でインド料理の会食をするなどということは、英軍の中では、何人も夢想だにできないことであった。藤原少佐の、この敵味方、勝者敗者、民族の相違を超えた、暖かい催しこそは、一昨日以来我々に示されつつある友愛の実践と共に、日本のインドに対する誠意の千万言にも優る実証である」他の兵士も満面の共感の意を表し、割れるような拍手を送ったといえます。

その後、日本軍はマレー半島の各地に投降を呼びかける宣伝ビラを撒き、そのビラを大切に握り締めて投降してくるインド兵が後を絶たなかったといえます。マレーに張り巡らされたインド系住民のネットワークが、一方で日本軍の進撃を支えたといわれています。

昭和16年の大晦日、藤原機関長はモハーシン大尉からインド国民軍（INA）の創設という重要な申し出を受けます。要求の中には「INAを日本軍と同盟関係の友軍とみなす」といった条文があったこともあり、この全てを受け容れた藤原機関長は、その足で山下奉文将軍の司令部を訪れ、認可を取り付けます。山下将軍もインド兵を信頼していました。こうして、12月31日、INAはマレー半島の片隅で産声を上げました。

昭和17年2月15日、シンガポールは日本軍によって陥落し、夕方には英軍のパーシバル将軍が降伏文書にサインして戦闘は終結します。2月17日、英軍のインド兵捕虜をF機関が代表して接收することになり、市内のフェアパークにインド兵が集められました。集められたインド兵の数は、日本軍の予想に反して、5万人にもおよび、公園はインド兵で埋め尽くされました。この5万人を前に、藤原機関長は堂々の大演説を行います。

「シンガポールの牙城の崩壊は、英帝国とオランダの支配下にある東亜諸民族のし

っこくの鉄鎖を寸断し、その解放を実現する歴史的契機となるであろう。」満場の聴衆は熱狂状態になり、言葉が翻訳されるたびに、拍手と歓声が巻き上がったといいます。そして、「そもそも民族の光輝ある自由と独立とは、その民族自らが決起して、自らの力をもって戦いとられたものでなければならない。日本軍は、インド兵諸君が自ら進んで、祖国の解放と独立の戦いのために忠誠を誓い、I N Aに参加を希望するものにおいては、日本軍捕虜としての扱いを停止し、諸君の闘争の自由を認め、また全面的支援を与えんとするものである」と、宣言すると、全インド兵は総立ちになって狂喜歓呼したといいます。藤原機関長の40分にわたる大演説は、I N Aにとって歴史的契機になると同時に、インド独立運動史に残る歴史的な宣言になりました。

昭和17年4月、藤原機関長は帰任の命を受け、南方戦線から離れることになりました。送別の宴で藤原機関長は、I N A将校から感謝状を贈られ、そこには「幾十万の現地インド人の命を救い、その名誉を守った」ことに対して、最大限の感謝の言葉が綴られておりました。F機関は、これをもってその使命を終えました。

<インド独立のきっかけとなったインパール作戦>

1944(昭和19)年3月、ビルマ・インド国境に横たわるアラカ脈を越えて、インド国内のインパールを攻略するインパール作戦行われます。日本軍はインド国民軍(チャンドラ・ボース軍司(写真))とともに悪戦苦闘し、参戦した8万5千人のうち、3以上を失いました。この作戦は、補給が続かないなかで、白骨を敗退するという悲惨な作戦ということで、憎悪をもって語られました。しかしながら、インドではこの作戦に対する評価が、日本とは全く違い「インパール作戦は、ボースによって戦われた、インドの独立戦争であった。あの作戦なくして、インドの独立はなかった。インパール作戦にゴーサインを出した、日本の東条英機首相に感謝する。太陽が空を輝かし、月光が大地を潤し、満天に星が輝く限り、インド国民は日本への恩義をわすれない。」と、平成9年(1997年)に、東京で開かれたインド独立50周年の懇親会場で、インド側代表だったグランナス・レイキ元インド最高裁判事が述べております。



ン山戦が令官万人街道れて日本

また、この式典で、インド国民軍の戦友会幹部の1人ヤダフィンディ国民全国委員会事務局長が、日本陸軍に対する感謝の念を靖国神社に奉納したいとして、外交評論家加瀬英明氏に託した感謝状には、次のように記されておりました。「インドが日本のお蔭をこうむっていることは、言語に尽くせない大きなものがあります。偉大な貴国はインドを解放するに当たって、可能な限りの軍事援助を提供しました。何10万にもものぼる日本軍将兵が、インド国民軍の戦友として、ともに血と汗と涙を流してくれました。インド国民は、日本帝国陸軍がインドの大義のために払った、崇高な犠牲を永久に忘れません。インドの独立は、日本帝国陸軍によってもたらされました。」そして、インパールの南10数キロのロツパチンの地には、日本将兵を称える慰霊碑が地元民の手で建てられております。

この慰霊碑を建立したモヘンドロ・シンハ村長は、次のように述べています。
「我々は、日本兵がインドの独立のために、命をかけて戦ってくれたことを良く知っていました。だから、日本兵に衣服や食料を喜んで提供したのです。ところがイギリス軍に知られ、妨害されるようになりました。日本軍は飢餓に追い込まれながらも、勇敢に戦い、そして戦死していきました。この勇ましい行動は、すべてインド解放のためであったのです！ 私たちは、いつまでもこの勇戦を後世まで伝えたいと思い、この慰霊碑を建立したのです。この塔は、日本軍人へのお礼と、独立インドのシンボルとしたいのです。そのため、村民で毎年慰霊祭を行っています。」

<シンガポール攻略後、マレーシアの独立を助けた日本軍>

1942(昭和17)年2月15日、日本陸軍の第25軍(司令官・山下泰文(やすふみ)中将(写真))は、60日にわたる激戦の末、イギリスのアジア最大の要塞・シンガポールを攻略しました。イギリス軍の降伏によって、150年にわたるイギリスのマレー支配に終止符が打たれます。



山下泰文陸軍中将

その後日本軍は興亜訓練所をつくり、マレー青年の教育に力を注ぎました。マラヤの全ての民族から優秀な青年を選抜し、教官と生徒が一体となり、率先して鍛錬の模範を示したので、日本人教官に対する尊敬と信頼はきわめて高かったと言われています。

そして、1,000名を超える卒業生が、マラヤ義勇軍の将校となり、戦後、マレーシア独立のための基幹要員となりました。

戦後、マラヤ大学副学長のウルク・アジス氏は「戦争という体験によって、我々は強くたくましくなりました。これを必要としない人もいるかもしれませんが、当時マレーシアでは、このように澁漑として、強固な人間を育成するために重要だったので、日本軍がもたらした『大和魂』のような考え方もつこと。おそらく今の日本には必要ないと思われるでしょうが、我国では、独立のためにこの精神がどうしても必要だったので。日本軍政下の訓練の結果、日本が降伏した後、英国人が戻ってきて、植民地時代より悪質な独裁制度をマレーシアに課そうとしたとき、人々は立ち上がったのです。何千という人々がこれに反対したのです。女性でさえも、デモに参加しました。これは戦争の心理的インパクトです。このことがあって、我々の独立は早まりました。だから我々は、この点を大変感謝しています。」と、述べています。

<インドネシアの独立に貢献した日本軍>

1945(昭和20)年8月17日、インドネシアが独立宣言をします。神武天皇紀元2605年の末尾の05をとって独立宣言文の期日としました。

日本が敗戦するや、英蘭連合軍は植民地を取り戻すべく、早速インドネシアに再上陸してきました。これを迎え撃ったスラバヤ戦争で、なぜインドネシア軍が、近代戦の経験がないのに勝てたのか。

それは、日本軍が連合軍に引き渡すことになっていた武器を、インドネシア人に奪われたと称して、巧妙に裏で渡していたこと及び緒戦わずか9日間でオランダ軍を降伏させたあと、日本軍は独立の指導者スカルノ（写真）とハッタを獄中から救出し、建国を急がせるため、祖国防衛義勇軍（ペタ）を編成させ、独立の戦士を養成させたことによります。

インドネシアのスハルト元大統領（写真）は、日本軍の軍事訓練を受けた元軍人であり、次のように述べています。

「郷土防衛隊での訓練は想像を絶していた。朝5時半から夜遅くまで軍事訓練、理論、精神教育が続き、最前線の小隊長となる者には、特に厳しかった。仲間の1人がたるんでいると、全員が夜中まで正座をさせられた。郷土防衛隊で叩き込まれた闘争精神、愛国精神抜きには、我々は再植民地化のために攻め込んできた、オランダを撃退できなかったと思う。我々は、日本軍に感謝している。」そして、終戦後、約2,000名の日本兵がインドネシアに残り、独立戦争に参加し、その約半数が戦死し、今でもインドネシアの国立墓地に眠っています。

また、1942(昭和17)年1月21日、東條首相は、第79回帝国議会でフィリピンとビルマの独立を認める演説を行い、両国とも、翌年昭和18年に独立します。



独立の指導者
スカルノ



スハルト
元大統領